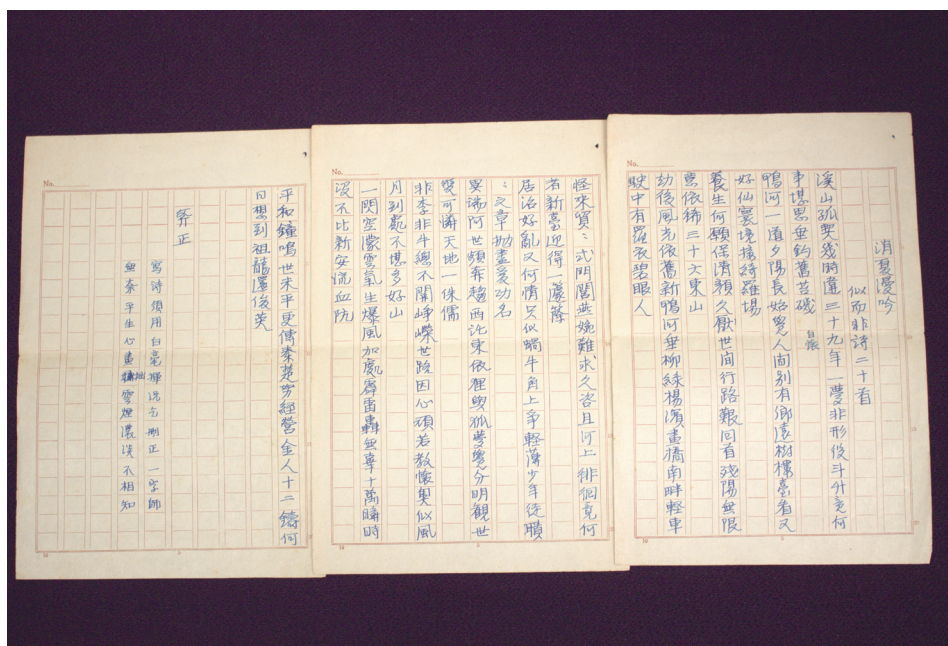


白川研究所便り



白川静博士の手稿「消夏漫吟」

目次 ◆ index

白川静博士の手稿	「消夏漫吟 似而非詩二十首」	芳村 弘道	2
第十六回立命館白川静記念 東洋文字文化賞の選考結果について	漢字学研究会活動報告(二〇二二年度)	大形 徹	3
「日中韓漢籍研究」プロジェクト報告	立命館土曜講座 京の手習い	芳村 弘道	10
日本文献研究プロジェクト活動報告	川崎佐知子	川崎佐知子	12
二〇二二年度連続公開講座の報告	川崎佐知子	川崎佐知子	13
二〇二二年度教育活動報告	高島 敏夫	高島 敏夫	13
文化事業活動報告(二〇二二年度)	後藤 文男	後藤 文男	14
第十三回創作漢字コンテスト	久保 裕之	久保 裕之	16
十二年目を迎えた「漢字教育士」の活動	加地 伸行	加地 伸行	18
書籍紹介	久保 裕之	久保 裕之	20

第17号

発行

23.3.31

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
電話 075-465-8006(事務局)
Mail ro-toyo@st.ritsumei.ac.jp
URL http://www.ritsumei.ac.jp/research/shikawa/

白川静博士の手稿

「消夏漫吟 似而非詩二十首」

所長 芳村 弘道



今回の本誌の表紙は白川静博士の漢詩の手稿「消夏漫吟 似而非詩二十首」である。副題の「似而非詩（似て非なる詩）」とは、詩の体をなしていない詩という謙辞である。この手稿は四〇〇字詰め原稿用紙三枚から

なり、二〇一八年に博士の御遺族から研究所に御寄贈戴いた書籍・資料群中より見出されたものである。二〇二〇年一月に平井嘉一郎記念図書館での白川静博士御生誕一一〇年記念展示「白川静博士の学問と生涯―新寄贈の資料類を中心として―」に出陳したことがある。博士は、広瀬徳蔵衆議院議員の事務所におられた青年期に「作詩の心得も必要と思つて、平仄を並べる稽古もした」（『回想九十年』、平凡社、二〇〇〇年四月、頁一七）と懐古しておられる。しかし、大学院時代に筆者は、若い頃には漢詩雑誌「雅聲」を購入し漢詩も作つたが、平仄を案じて時間を費やし読書の妨げになるので続けなかったという主旨のお話を博士から伺つたことがあり、その後は作詩されることが稀であつたように思う。それゆえ、この手稿は甚だ貴重といえよう。

「消夏漫吟」は七言絶句二十首の連作である。第一首に「三十九年一夢非なり」とあるので、数え年、三十九歳すなわち昭和二十三年（一九四八）の所詠と推測される（満年齢ならば翌年の作）。時に博士は新制立命館大学文学部助教授であつた。戦後の社会に目を向けられた詩が少なくないが、次に掲げる第九首は、三年前の原爆の惨禍を夏の一日に回想して詠われたものである。

一閃空濛雲氣生 一閃空濛として 雲氣生じ

爆風加處霹靂轟 爆風 加はる処 霹靂轟く

無辜十萬瞬時没 無辜（罪のない人）の十萬 瞬時に没す

不比新安流血院 新安 流血の院に比せず

結句に、項羽の楚軍が新安で秦の兵卒二十余万人を地中に落として大量殺戮した故事（『史記』項羽本紀）の比ではない、原爆は極めて残酷な行為であると強く訴えておられる。博士の恩師の橋本循先生にも原爆の惨禍を主題にした「原爆歌」（『蘆北山人詩草』所収。『橋本循著作集』第四卷、法蔵館、二〇一九年三月再録）があつて、「昭和」四十五年」との制作時期の自注が加えられているので、博士の一首は恩師に先立つ作である。なお内田誠一氏は家蔵の橋本先生自筆書幅をもとに「橋本循『原爆歌』初探」（『安田女子大学紀要』第四七号、二〇一九年）を撰して「原爆歌」を紹介された。次に紹介する「消夏漫吟」末尾の一首も戦争に関する内容である。

平和鐘鳴世未平 平和の鐘鳴るも 世は未だ平らかならず

更傳秦楚努經營 更に伝ふ 秦楚 経営に努むると

金人十二鑄何日 金人 十二 鑄せらるること何れの日か

想到祖龍還俊英 想ひ到る 祖龍 還つて俊英

「平和鐘」は、一九四七年に作られた広島初代「平和の鐘」を指すであろう。起句は、第二次世界大戦が終わってから、「平和の鐘」が鳴らされても、まだ真の平和は訪れなかったことをいう。承句は、戦国時代末期に西北の秦と南方の楚とが激しく抗争し、合従、連衡の策を用いて国家の経営に努めた故事を借りて、アメリカ・西欧諸国とソビエト・東欧諸国との対立が深まりつつあることが取り沙汰された当時の国際情勢を寓意すると解せられる。転句は、秦の始皇帝が中国統一後に天下の兵器を集めて十二体の巨像を铸造した故事を用い、兵器が廃絶される日を待ち望む意を示している。結句には、とかくの非難はあるものの、兵器をこの世から無くしたという意味では英傑と思われる祖龍の別名をもつ始皇帝（『史記』始皇本紀）が思い出されると詠い、博士は世界の平和を希求された。

この詩が詠われてより約七十四年後の二〇二二年二月に、ロシアがウクライナに軍事侵攻を起こし、なおも戦禍が止まない。二〇二二年の「今年の漢字」に「戦」字が選ばれたのは、ロシアのウクライナ侵攻が強く人々に意識されたゆえという。「平和鐘鳴世未平」の句が過去のこととして読まれる日を切に望む。

（立命館大学特任教授）

第十六回立命館白川静記念 東洋文字文化賞の選考結果について

立命館白川静記念東洋文字文化賞は、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所が、東洋文字文化の分野における有為な人材を奨励支援するために、功績のある個人および団体の業績を表彰することを目的としています。日本社会・文化の継承と発展、東アジアの平和と繁栄のために本賞の制定がその一助となることを願っています。

二〇二一年度も全国より応募があり、厳正な審査の結果、一名の方の受賞が決定しました。

授賞式は二〇二二年六月二十五日（土）に衣笠キャンパス平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルームにて、仲谷善雄総長臨席のもと執り行われました。受賞者の狩野雄氏、には、受賞挨拶とあわせてご自身の研究成果について御報告をいただきました。

〈第十六回〉二〇二一年度募集分

立命館白川静記念東洋文字文化賞優秀賞

狩野 雄

武庫川女子大学文学部 教授

受賞理由

狩野雄氏は、東北大学大学院在籍中より一貫して中国六朝文学の研究を進めておられる。

本書は、西晋以前の文学作品を主たる対象に、香りをキーワードとしてその表現を丹念にたどることで、文学における香りの変遷と拡大を考

察したものである。香りを主題とする文学研究は、日本文学では古典から現代文学まで盛んにおこなわれているが、中国文学においては日中両国のいずれにおいてもはるかに少ない状況にある。三国西晋を対象を絞って考察を進められた本書は他に類がないという点で非常に貴重な研究成果である。

六朝以前の資料にはさまざまな問題があるが、狩野氏は日中の複数のテキストを対照し、注釈書についても周到に目配りしてそれぞれの時代性について確認し、また広く心理学や歴史学・美学などの関連領域の先行研究を参照して考察を進めておられ、その研究姿勢は極めて堅実であり、本書の学術的価値をおおいに高めている。

狩野氏は本書において、香りは文化的なものであり、また他の感覚と共起して認識されるものであると述べておられる。本書は、実体のない香りの表象を時代と風土に即した精緻な解説によって取り出して、詩人たちの感受性と言語化の試みを解き明かした好著であり、六朝以後の詩歌における香り表現や東アジアにおける香り表現など、他の研究にも裨益するところの大きいすぐれた業績であると高く評価できる。

よって審査員一同は、同氏の業績に対して白川賞優秀賞を授与することを決定いたしました。

受賞者の声



この度は荣誉ある白川賞（東洋文字文化賞）を授けていただきまして誠にありがとうございました。授賞の報せを受けて、驚くとともに、白川静先生には文字学と並んで古代文学の分厚い研究があることにあらためて想いを致すこととなりました。白川先生の学問の

広さと深さのなかで私の研究も認めていただくことになったのだと思います。

授賞の対象となったのは、拙著『香りの詩学——三国西晋詩の芳香表現』です。該書は中国の先秦から南北朝期にかけての詩歌辞賦作品および経伝・史書等に見える香り・匂いに関する表現を対象として考察を試みたものです。そのなかでも、「芳香の気」の発見をはじめとする香り・匂いの表現の転折点となったと考えられる、三国西晋期の詩歌作品に関する考察を中心に据えています。

目に見えない香り・匂いは言語化されにくいとされますが、それでも詩人たちは表現を凝らし言語化しようと試みました。その営みには、詩の内側にあつて詩を詩たらしめている何ものかに触れるよすががあるのではないか、そんなことを考えて取り組んできました。明確な用例が多くな、言葉に載りにくい感覚表現であるためにしばしば他の感覚と共起するような表現となることなどによって、字義の多層性に意識を向ける必要があります。どれだけ探り当てられたか心許ない思いも残ります。が、芳香表現を考察対象に定めたことによって、漢字一字についての検討により多くの時間を費やすこととなったのは、意味のあったことだと考えています。

少し毛色が変わった研究であることは、私自身が感じているところです。それでも、今回賞をいただいたことで、こうしたものも懐の深い中国学は受け容れてくれる、こうした部分ももう少し進めたらどうか、とお励ましをいただいたような気持ちになりました。受賞を励みとして、今後も目を凝らし、耳を澄ませ、鼻を利かせて詩文に向き合ってゆきたく思います。

選考
委員

芳村 弘道（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所 所長）
委員 下中 美都（株式会社平凡社 代表取締役社長）

大形 徹（立命館大学衣笠総合研究機構 教授）

加地 伸行（立命館大学衣笠総合研究機構 研究顧問）

杉橋 隆夫（立命館大学衣笠総合研究機構 研究顧問）

萩原 正樹（立命館大学文学部 教授）

上野 隆三（立命館大学文学部 教授）



第16回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」表彰式の様子
（2022年6月25日、立命館大学衣笠キャンパス 平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルームにて）
後列左より石井真美子教授、萩原正樹教授、後藤文男上席研究員、松尾肇子研究員、
杉橋隆夫研究顧問、上野隆三教授、松本保宣教授、
前列左より加地伸行研究顧問、芳村弘道所長、狩野雄氏、仲谷善雄総長、大形徹教授



当研究所芳村所長挨拶



立命館大学学長挨拶



狩野雄氏に授与



芳村所長と狩野氏

漢字学研究会活動報告(二〇二二年度)

副所長 大形 徹

漢字学研究会

四月(一〇〇回) から二月(二〇八回予定)。於キャンパスプラザ京都大学院等共同サテライト。科研(後出)研究会とコラボしてハイブリッドで開催。参加者は延べ一四七名(一二月まで)。

第一〇〇回 四月一六日 二二名

・大形徹…「疾病・疫病観」

・笠川直樹…「曾公求編鐘」

第一〇一回 五月二二日 二三名

・佐々木聡…「発病占の二千年史」

・石川大我…「商周古文字読本」甲骨文…十六片・十七片

・笠川直樹…「曾公求編鐘」

第一〇二回 六月一八日 一九名

・多田伊織…「黄色くなる病いーインド原典と漢譯佛典からー」

・西尾真澄…「修士論文中間発表」

・末次信行…「新出資料紹介」

第一〇三回 七月一六日 一五名

・六車楓…「清華簡『五紀』の身体と疾病に関する記述について」

・安東麟…「商周古文字読本」『習鼎』

・笠川直樹…「曾公求編鐘」

第一〇四回 九月一七日 二二名

・桂島宣弘「民衆宗教における「病氣直し」——幕末〜明治期金光教における「病氣」と「直し」をめぐる言説と実践——」

・笠川直樹…「曾公求編鐘」

・山田崇仁…「屈子赤目簠」

第一〇五回 一〇月一五日 一二名

・孫瑾…「宋の民間医療観と房中術実践」

・佐藤信弥…「毛尊・毛卣」

科研の会(漢字学は休会)

一二月一九日 一一二名

・董伊莎…「儒教関係思想における「厲」について」

第一〇六回 十二月一七日 二五名

・永原順子…「水難怪異伝承の比較研究——東南アジアでの調査から——」

・村上幸造…「戎生編鐘」



永原順子氏の発表の様子(キャンパスプラザ京都) 12月17日

第一〇七回 一月二三日二六名

・田天「秦漢出土病方的發現與發展」



田天氏のオンライン発表（キャンパスプラザ京都）1月23日

『漢字學研究』第一〇號

○論説・「大司空村東南地丁25卜辞の分類」 石川大我・「資料紹介」 青銅器・晉侯鳥獸合體尊」 末次信行 ○金文通解・嬭加編鐘 笠川直樹・授鼎 佐藤信弥・柞伯鼎 村上幸造・殷簋 三輪健介・晉公盤 山田崇仁・古文字學研究文獻提要 林澧の研究より 甲骨文中の商代方國聯盟 佐藤信弥・眞該走出疑古時代嗎？…對當前中國古典學取向的看法 山田崇仁・古文字轉注舉例 村上幸造・豐豐辨・豐豐再辨 笠川直樹・

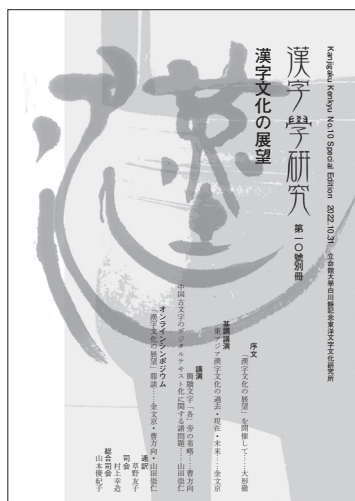
長子口墓不是微子墓 落合淳思 ○古文字學論著目 二〇二〇年古文字學論著目 横大路綾子



漢字學研究第10号

『漢字學研究』第一〇號別冊

○序文「漢字文化の展望」を開催して 大形徹 ○基調講演 東アジア漢字文化の過去・現在・未来 金文京 ○講演 簡牘文字「各」旁の省略 曹方向 ○中国古文字のデジタルテキスト化に関する諸問題 山田崇仁 ○オンラインシンポジウム「漢字文化の展望」 鼎談 金文京・曹方向・山田崇仁 ○通訳 草野友子 司会 村上幸造 総合司会 山本優紀子



漢字學研究第10号別冊

○著書・論文・研究発表・講演等 落合淳思「形音義による漢字の構成要素の分類」『日本漢字學會報』第四号。『漢字字形史字典』【教育漢字対応版】東方書店、二〇二二年。同『漢字の音』東方書店、二〇二二年。佐藤信弥「西周金文の製作意図について——同一の事件について記録した金文より探る」『立命館東洋史学』第四十五号、同『The transmission of ritual related characters from the Shang to the Zhou: Taking Liao and Di as examples』Journal of Chinese Writing Systems vol.6 issue2, East China normal university. 同「韩伯丰鼎铭与西周时期王命记录的变化」『黄河文明与可持续发展』第十九輯、河南大学黄河文明与持续発展研究中心、同『论清华简《撮命》的“蒿京”与西周甲骨文中的“蒿”』『國際漢語教育史研究』第三輯、商務印書館、三月。松宮貴之「阮元の地域移動と書論の変化：雲南赴任期の書法言説の整理を中心として」京都語文三十号、同『説文解字叙』批判 三段文字史觀の易と文身（入れ墨）東方 web 二〇二二年八月、同、講演「川端康成の書と思想」川端康成文学館。大形徹、「白川静著『字統』、漢字の名著」の一冊、漢字の窓第四卷 第一号。同「ゲーム・遊ぶ」RADIANT ISSUE17 白川学の世界、同「地域」RADIANT ISSUE18。同、くらしの数字考「漢字六万字、日本で使うのは四%」「死字」や「逆輸出」も」二〇二二年・六・一〇、日本経済新聞。同「莊子と語る」二二二〜三十、東大阪新聞。芳村弘道・大形徹、立命館大学 知の拠点を訪ねて vol.1「豊かな漢字文化から東アジアを一望する 白川静記念 東洋文字文化研究所」<https://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=2749> Tohru Ohgata, Interpretations of the term Fu Yao (扶搖) in the Zhuang Zi outer chapter Zaiyou (在宥) and Guo Xiang Zhu (郭象注), Journal of Chinese Writing Systems 6。同「博覧亞洲論壇二〇二二年会分会（海南島）：亞洲文明：多元共生、面向未來」。同「出土文字資料と字書、出土圖像資料と文献解釈——「扶搖」と「扶桑」」「②「始」と「胎」をめぐって」中国出土文献研

究会（大阪大学）。同「龍角考」「麒麟の角」中国海洋大学オンライン講義。同「麒麟について」早稲田大学會津八一記念博物館祥瑞研究会。同「中国—日本を横断した病と鬼の研究」その一〜四 Garage Labo Tokyo【シヤナナTV】。同「鬼系の病因論と気系の病因論」大阪伝統生薬研究会、令和四年度第三回研究会。大形徹・山本優紀子・池内早紀子「月の中にウサギとカエルがなぞっているのか」第三回、日中韓十五夜シンポジウム、宮崎公立大学。・張利 About the King of Han-Winu (漢委奴国王) on the gold Seal 二〇二二年十二月「中国文字」SAGE 2022, Vol (4) pp.265-272。同「おもしろ漢字」六冊（小学校一〜六年生）一〇二六年漢字の成り立ち教材及びオンラインデータベースの作成。二〇二二年一月。同「魂鎮めと御霊神社」「真」の字源を探求」二〇二二年四月二十八日 奈良シニア大学・同「こわくてゆかいな漢字」十二支の漢物語語・二〇二二年六月二十八日・朝日カルチャー文化講座・「十二支の縁起と漢字」二〇二二年八月二〇日、福井県教育庁生涯学習・文化財課「白川文字講座」・同「倭人の源流」「西双版纳」を訪ねて——古俗の中で蘇る文字」二〇二二年九月八日 奈良シニア大学講座。同「漢字から見る人の一生——こわくてゆかいな漢字」二〇二二年九月二〇日朝日カルチャー文化講座・同「食と酒の漢字——こわくてゆかいな漢字」二〇二二年十二月六日 朝日カルチャー文化講座・同「倭人の源流」「西双版纳」を訪ねて——古俗の中で蘇る文字」二〇二二年四月二十三日大阪シニア大学講座・同「日本漢字・仮名文化」二〇二二年四月二十九日 山東藝術學院書法学院 書法專攻國家級一流本科專攻建設系列。同「漢字工作坊：日文和中文的同形異義字」二〇二二年十二月五日 台灣慈濟大學「亞洲文明的堅強與東亞文化的柔軟——中日語言工作坊」・山本堯「太古の奇想と超絶技巧 中国青銅器入門」新潮社、二〇二三年。同・山本堯・樋口陽介・内田純子・新郷英弘「東周青銅器施紋技法の基礎的検討——侯馬出土鏤型資料を中心に——」『泉屋博古館紀要』第三十八卷、

二〇二三年・同「楚國政權構造試論—考古資料よりみた政權基盤の變遷—」『東洋史研究』八一(三)、二〇二三年・同「殷周青銅器における伝世・復古とその史的意義」『考古学研究』六十九(三)、p.21-36、二〇二三年・同「なぜ祠堂に龍が描かれたのか」『古代中国の神話と祥瑞—武氏祠画像石拓本—』『展覽会図録』、二〇二二年・同「中小規模美術館における調査研究のいま—泉屋博古館の実践例から」『博物館研究』五十七(十一)、二〇二二年・同「東周時代華中地域における青銅彝器生産の変革と画期」『考古学雑誌』一〇五(一)、二〇二二年・同「殷周金文辨偽新考」『中国出土資料研究』二十六、二〇二二年・同「殷周青銅器における伝世・復古とその史的意義」『考古学研究』第六十八回総会・研究集会、二〇二二年四月二十四日・重信あゆみ・Historical Flow of Kanji Acquisition Materials in Japan, 第十二届漢字與漢字教育國際研討會 In Portland, 二〇二三年二月三日・同「オンラインひらがな習得教材における適性処遇交互作用の実証研究」、『藍野大学紀要』三十五、二〇二三年三月・九州古代史の会」一月例会・黄當時「埴輪」とはなにか——『古事記』因幡の白兔が和邇を欺く説話から言語情報を借りて——もち文化センター、二〇二二年一月・久保輝幸『与花方作譜』廣西科学技術出版社・同「『百川学海』の諸版本について」『歴史文化研究』(九)・同「番薯伝播史研究の新視角、ポストコロナ時代における食文化—伝統・産業・地域振興—(立命館大学食総合研究センター)」二〇二二年十一月二十七日・同「牽牛子傳播史研究、東亞文化意象的博物館書寫與物質文化」中央研究院、二〇二二年十一月二十七日・野田尚史・中尾有岐編『日本語コミュニケーションのための聴解教材の作成』ひつじ書房、第四部第二章「学習者が講義を聞く難しさ」(久保輝幸・高山弘子)・瀧朝子編『吳越国 一〇世紀東アジアに華開いた文化国家』勉誠出版、第一部 吳越国と東アジア諸国「江浙地方と日本におけるボタン栽培の始まり—吳越国からの伝来の可能性」・趙中振、劉靖、陳潘、久保輝幸、西博博

徳的本草之縁——從一道日本高考试题談起。中華医史雜誌 五十二(四)。Terryuki KUBO, Zhong-Zhen ZHAO. History of the Chinese Medicinal Gelatine, Eijiao. Chinese Medicine and Culture 5 (1) 39-45.

○漢字關係の授業 横大路綾子・末次信行・笠川直樹・村上幸造・大形徹「漢字学」姫路市立生涯学習大学校 一年・二年コース、大形徹「書道と漢字教育」・「毛筆の指導方法」放送大学大阪学習センター。科研費等(代表)

・山田崇仁 基盤研究(C) 中国殷周金文のデジタルテキスト作成に関する基礎的研究

・山田崇仁 基盤研究(C) 情報化時代における佚文収集の手法についての研究: 大蔵経からの抽出を事例として

・落合淳思 基盤研究(C) 漢字の部首(字素・意符)の多様性とその時代的変遷

・山本堯 若手研究 春秋戦国時代青銅器の生産と流通に関する複合的研究

・大形徹 基盤研究(B) 東アジア漢字文化圏の疾病・疫病観の史的・現代的展開—鬼系病因論の起源と思想的水脈

・大形徹 奈良県立万葉文化館委託共同研究『万葉集』と道教・仏教・医学—超越的存在への憧憬と苦からの解放

・大形徹 漢籍を中心とするカザフスタン教育科学省中央図書館珍本書庫収蔵資料に関する研究 立命館大学国際共同研究促進プログラムスタートアップ型

「日中韓漢籍研究」プロジェクト活動報告

所長 芳村弘道

疫情の鎮静が二〇二二年度もならず、本研究プロジェクトの重要な活動に位置づける南京大学域外漢籍研究所・高麗大学校漢字漢文研究所との学術協定に基づく「東亜漢籍交流学術会議」の開催が延期された。これは南京大学側がホスト校となって催される第七回の学術会議であったが、三年連続の延期となった。しかし高麗大学校漢字漢文研究所の呼びかけで、「東亜漢籍交流学術会議」をオンラインによる特別講演のかたちをとって、高麗大学校の主催で実施することになり、二〇二二年十一月十九日に高麗大学校沈慶昊教授「『綱鑑金丹』の朝鮮流入とその歴史文化上の影響について」・南京大学の張伯偉教授「東アジア漢籍交流研究方法の再検討」・芳村弘道「朝鮮渡り唐本の調査現況」の講演が行われた。視聴者は二〇〇名を越えて、なかなかの反響であった。閉会の挨拶において、「学術会議」とは別に、若手研究者を主体とするオンラインでの小規模な研究発表会の実施を試みる提案を行ったところ、南京・高麗両研究所の賛同が得られたので、来年度に開催される予定である。また南京大学の張伯偉教授は「東亜漢籍交流学術会議」を来年こそは実施したいと改めて表明され、その実現を期待することで講演会が終了した。なお芳村は、閉会の挨拶の最後に下記の言葉を添えた。

最近の国内外の情勢について、日本では「分断」という言葉が盛んに言われております。確かにその言葉を現実として認識することがあります。殊に感染症の今の時期は、交流が容易でないため、閉鎖的な考えに陥りやすいので、「一層」「分断」が進むように思われます。過去においては日中韓の間で直接的な交流の機会が少なかった訳で

すが、間接的ではあっても、時空をまたぎ、地域を越えて、いにしえの賢人に学び、あるいは文人の思いに共感して人生を見つめる役割を果たしたのは漢籍でした。今が「分断」の時代であるのならば、東アジアの漢籍交流を我われ日中韓の三研究所が進める意義は、これまで以上に大きいと確信しています。今後も高麗大学校漢字漢文研究所と南京大学域外漢籍研究所との学術交流を有意義に進展してゆきたいと願ってやみません。

課題である漢籍の閲覧調査も計画通りに進まなかったのは遺憾であったが、本学平井嘉一郎記念図書館西園寺文庫・京都大学人文科研究所・京都大学文学部図書館・同経済学部図書館・同法学部図書館・公益財団法人陽明文庫・慶應義塾大学斯道文庫・国立公文書館内閣文庫・東京都立中央図書館で「朝鮮渡り唐本」を中心とした書誌調査が実施できた。その成果も加えたのが、上記の「東亜漢籍交流学術会議 特別講演」の芳村「朝鮮渡り唐本の調査現況」であった。

「朝鮮渡り唐本研究」の研究発表会を二〇二三年二月二十五日に衣笠キャンパス清心館二〇六号教室でオンライン併用によって開催、下記の発表が行われた。

住吉朋彦（学外研究員 慶應義塾大学斯道文庫教授）「今関天彭の漢籍蒐集と文献学」

魯耀翰（客員協力研究員 高麗大学校研究教授）「李朝前期における王安石詩集の輸入と再編について」

富嘉吟（学外研究員 お茶の水女子大学助教）「掖斎旧蔵『竹友集』について」

靳春雨（専門研究員 立命館アジア・日本研究機構）「菊池三溪稿本『学聚堂遺稿』に見える評語について」

芳村弘道「二〇二二年度の朝鮮渡り唐本の調査報告」

昨年度から萩原正樹副所長を中心として、明治維新以降の日中韓三国

の文人による詩詞を通しての交流の実態を明らかにすることを企図し、相互の文学や交流の様相、さらには相互理解にどのような影響を与えたのかについても探究する「日中韓文人交流研究」を進めている。その研究発表会が二〇二三年二月二十六日に衣笠キャンパス清心館二〇六号教室でオンライン併用によって「日中韓文人交流研究会」を開催し、下記の発表がなされた。

井上充幸（文学部教授）・猪俣貴幸（本学大学院生）「蓬左文庫蔵『銅人臉穴鍼灸図経』拓本とその来歴について——十七世紀前半の東アジアにおける学術交流史解明の手がかりを探る——」

斬 春雨 「山田政苗『蟬堂詩鈔』及び所収詞三首」

魯 耀翰 「善隣唱和」と『翠雲雅集』に現れる日韓文人の詩文唱和について」

中山陽菜（台湾大学四回生）「大正、昭和期の漢詩壇——漢詩月刊『文字禪』及其續刊『漢詩春秋』の投稿状況」

余 筠珺学外研究員（台湾大学助理教授）「久保天隨與臺灣詩社」

萩原正樹 「鷗夢新誌」に見える中国の詩人」

主な研究員の本年度の業績

【著 書】

・高田宗平客員協力研究員（大阪公立大学客員研究員）

『日本漢籍受容史』（八木書店出版部、二〇二二年十二月、六五八頁）

・斬 春雨

『中国・日本の詩と詞——『燕喜詞』研究と日本人の詩詞受容』（朋友書店、二〇二三年三月、二九三頁、予定）

【論 文】

・萩原正樹

「和刻本『事林広記』中所見宋詞——『全宋詞』未収『迎仙客』詞六首」

（「詞学」第四七輯、二〇二二年六月）

「浦川源吾編『支那歴代純文学選』について——唐宋詞収録の講讀用教科書と立命館大学——」（『學林』第七五号、二〇二二年二月）

・住吉朋彦

「慶應義塾圖書館蔵『論語疏』卷六概述」（『國際漢學研究通訊』第二三・二四期、二〇〇二年六月、陳捷譯）

「天理図書館蔵五山版考述（一）漢籍之部（上）」（『ビブリア』一五八号、二〇二三年十月）

・富嘉吟

「『川文粹』考」（『唐代文学研究』第二十二輯、二〇二二年十二月）

・芳村弘道

「村瀬栲亭の『李太白峨眉山月歌地理指掌図』疏解」（『學林』第七十五号、二〇二二年十二月）

【学会発表】

・萩原正樹

「『集曲名詞』考論」（二〇二二年五月二十日、第十七届「文学与美学」国際学術研討会、於台湾淡江大学）

「愛好唐宋詞的又一位日本学者——浦川源吾与其所編『支那歴代純文学選』——」（二〇二二年十一月二十日、華東師範大学「東亞詞学文献整理与研究」学術研討会、華東師範大学）

・芳村弘道

「朝鮮渡唐本研究」（二〇二二年五月二十一日、第二届古籍文献收藏、研究及整理出版國際学術論壇、北京大学中国古文献研究中心・温州大学人文学院・広西師範大学出版社）

・富嘉吟

・富嘉吟

「江戸時代における『瑠玉集』の流传について」（二〇二二年九月二日、二〇二二年中國中世寫本研究夏季大會、広島大学）

・ 靳春雨

「経学者佐藤一斎の填詞―新見六首をめぐって」(二〇二二年十月九日、日本中国学会第七十四回大会、早稲田大学)・「高青邱詩的伝播―長三洲和近藤元粹の次韻詩」(二〇二二年十月二二日、第四届智能媒体与诗礼文化研究国际論壇、上海大学文学院)。



22年度の朝鮮渡り唐本研究会



22年度の日中韓文人交流研究会

立命館土曜講座 京の手習い ―立命館で学ぶ日本語学・日本文学―

川崎 佐知子

二〇二二年十二月の立命館土曜講座は当研究所企画であった。第三プロジェクトの「日本文献研究」班が担当した。講座のテーマは「京の手習い―立命館で学ぶ日本語学・日本文学―」に設定した。

十二月三日(第三三七一回)の小椋秀樹研究員による演題「現代日本語における漢字の使用実態と漢字政策」は、漢字に関する国の施策を紹介し、とくに文化庁による「常用漢字表」が重要であること、「当用漢字表」(一九四六年)を改定して一九八一年に実施された「常用漢字表」が、二〇一〇年に改定された経緯などを説明したうえで、二〇一〇年の改定を評価し、検証する内容であった。

十二月十日(第三三七二回)は、川崎が「嵯峨本願寺の和漢歌仙」と題し、東本願寺の別業渉成園(京都市下京区、別称枳殻邸)にかつて存在した「偶仙楼」に飾られていた近衛家澁筆・渡辺始興画『和漢六歌仙板額』一函十二枚が宗教法本願寺(通称嵯峨本願寺、京都市右京区)に現存することを紹介し、その作成された事情と内容上の特色、近衛家と東本願寺との関係を論じた。

各回とも、オンライン配信(ウェビナー)の特性を活かし、豊富な図表・写真を資料として提供できた。一般の方々にも馴染みのある話題であったため質問も多く飛び出し、活気のある講座であった。

日本文献研究プロジェクト活動報告

川崎 佐知子

第三研究プロジェクトは、東洋文字文化に関連の深い日本の文字・漢字・漢語・古典籍（和書・漢籍・仏典）を研究対象とする。日本固有の文献を用いた研究は、根本資料の独自性および長年蓄積された研究方法の独創性という特色を有する。海外の研究者の注目も集める分野であり、広く国際的な人文科学研究として貢献する。こうした現況を踏まえ、二〇二二年度は三つの課題を設定し、各班それぞれに活動した。

課題(1) 古記録・古文書における漢字・漢語の変遷

課題(2) 『日本語歴史コーパス』を活用した漢字・漢語の通時的研究

課題(3) 近世前期近衛閑白家の漢学に関する研究

課題(3)では、近衛家の漢学研究会を結成し、近世前期の大徳寺僧桂嶽宗芳の詩文集『桂芳集』を会読した。とくに公家近衛基熙との交流の解明を目指した。両者の交流は桂嶽宗芳が近衛家菩提所の大徳寺芳春院第六世となった元禄十一年（一六九八）末から同十三年までの二年間であること、交流期間が限られるのは、元禄十三年十一月一日の桂嶽宗芳示寂に因ることなどが判明した。並行して、『桂芳集』の訳注作業を進めた。

研究会は対面を基本としたオンライン併用開催であった。参加者は学内構成員を中心とするものの、海外より、黄鶯氏（福州大学外国語学院・講師）が参加した。また、本学大学院文学研究科日本文学専修博士後期課程に在籍する高語莎氏を、リサーチアシスタントに採用した。研究会運営や訳注作業の補助を務めた。喫緊の課題である若手研究者育成に少しでも貢献することができたと認識している。

二〇二二年度連続公開講座の報告

客員研究員 高島 敏夫

今年度は「『金文講座』——白川静『金文通釈』に沿って」と題して全十回の公開講座を実施しました。今までと違うのは、インターネットの動画サイトであるユーチューブも併用した点です。『金文通釈』は専門性が高く、研究者にとってもかなり読みづらいため、名前だけが知られていて読まれないままになっている書物ですが、「金文通釈」を読まずして金文の研究が深まるはずがありませんので、これを多くの人に読めるようにしたいという積年の思いを、このような形で実現することにしたのです。撮影から動画に仕上げるまでの作業を全て一人でやらざるを得ず大変ですが、続いているうちに段々と要領が分ってきました。公開講座に先立ってユーチューブに流しますので、受講者が予習や復習をするのにも役立ちます。公開講座ではまた動画とも一味違う展開をしますので、両方見て頂くことで一層効果があるようです。来年度以降も続けます。

（白川研究所客員研究員）

二〇二二年度教育活動報告

上席研究員 後藤 文男

今年度は、初等・中等教育の現場でも、通常の教育活動を取り戻す一年となりました。今年度は北海道に「田中学園 立命館慶祥小学校」が開校し、一年生から四年生までの児童たちが新たに加わることになりました。白川WGの一員でもある立命館小学校の長谷川昭先生が、開校に合わせて、北海道に行かれたので、早速初年度から「成り立ちとつながりで学ぶ白川漢字」を、精力的に取り組んでいただきました。白川静先生の描かれた漢字教育が、北海道の子どもたちにも広がっていく絶好の機会となるよう、今後の活動に期待しています。

以下、二〇二二年度の主な取り組みをご報告いたします。

(1) 「第一三回創作漢字コンテスト」入賞、「第九回白川静漢字教育賞」

優秀賞を受賞

①昨年度の最優秀賞(小学生)に引き続き、今年度は立命館高校二年生の生徒が、「創作漢字コンテスト」(産経新聞社、白川研主催)で、二二七四九名の全応募者の中から「成語・成句特別賞」を受賞しました。「言」の言葉モチーフに「ひとこととおおい」の意味を持つ漢字を創作しました。(写真1)

②福井県が主催する「白川静漢字教育賞」【小学生の部】川柳部門で、立命館小学校四年生の児童が優秀賞(最高賞)を受賞しました。

作品は、「心ひかれ ふりむいたんだ それが愛」「愛」の成り立ちをモチーフに、素直な心を川柳に仕上げたところが評価され

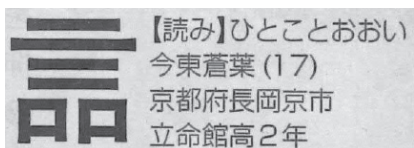


写真1 「立命館高校 創作漢字コンテスト入賞作品」

ました。

(2) 「田中学園 立命館慶祥小学校」(長谷川昭先生)での取り組み(写真2)

一年生・四年生までの全学年(初年度)で、年間一六のテーマで授業が行われました。長谷川先生が、テーマごとに独自のパワーポイントを作成し、授業の最後に自製の「白川漢字ノート」に習った漢字と古代文字を書き、感想を書くという流れで進められました。主なテーマは、「漢字のたんじょう、いち、に、さん」(一年生)、「だれの足あと?」(二年生)、「じつと動かず、主になる」(三年生)、「漢字の中の力持ち」(四年生)などです。長谷川先生によると、とくに「古代文字を書き出す活動に意義があった」ということです。知らなかったことに出合えた喜びが一生懸命丁寧に書き写す姿の中にあつたようです。また、感想も「今まで別々と思っていた漢字がつながりがあるとわかってもっと知って覚えたい」と書く児童が多かったということです。授業の後には、図書館の「白川漢字」に関する本の貸し出しが増えるといった現象が起き、子どもたちの漢字学習への興味を引き出す取り組みになったと長谷川先生もその手ごたえを感じておられる様子でした。「北の大地の子どもたち」とともに、さらに旺盛な実践が生まれることを期待しています。



写真2 「立命館慶祥小学校の授業風景」

(3) 立命館小学校での「白川漢字」の取り組み

①「読書の時間」・「国語力向上の時間」を中心とした白川漢字の取り組み

今年度も、大橋輝子先生は一年生から四年生の「読書の時間」で一四回、志賀都子先生は二年生の「国語力向上の時間」で七回、白川漢字に取り組みました。大橋先生は、古代文字を通して読書の扉を開く実践と「漢字ミュージアム」での「古代文字漢字展」等を取り組みました。また、志賀先生は、「絵本から始まる漢物語」と題して絵本と漢字の世界を結ぶ実践に取り組みました。

②京都漢字ミュージアムで、「第二回わたしの好きな漢字展」を開催（写真3）

昨年に引き続き、今年度も十一月に「京都漢字ミュージアム」で開催されました。作品は、四年生の児童たちが、思い思いに選んだ古代文字一字を越前和紙に書いたものです。名前も古代文字。落款も、消しゴムハンコで作りました。今年の作品も、力強いタッチで書かれた作品が多く、とても素敵な展覧会になりました。

③伊東信夫先生の『漢字成り立ちブック』が漢字学習の副教材に採用されました



写真3
「立命館小学校 わたしの好きな漢字展」

立命館小学校では、今年度から全学年で『漢字成り立ちブック』（伊東信夫著 太郎次郎エディタス）が、漢字学習の副教材として採用されました。全学年で活用が始まりましたが、その副教材活用の一環として、学期に一回のペースで、後藤による「白川漢字」の授業を全学年で取り組みました。

（4）他の附属校での取り組み

①立命館中学校高等学校

・七月～八月に行なわれた二回の「入試説明会」で、「白川漢字」の体験授業（中学受験対象）と創作漢字に「国語科」の先生方と取り組みました。

・九月「創作漢字コンテスト」への応募

②立命館守山中学校高等学校

・五月～七月 月一～二回 滋賀県東近江市にある「日本ラチーノ学院」の小学校で「白川漢字」の授業に取り組みました。

・十月 滋賀県愛知郡愛荘町の「コレジオサントナ学園」で「漢字フェスタ」を開催しました。

・十二月 高校二年生に「漢字の成り立ちとつながり、そして大学の学び」について考える授業を行いました。

（5）河内長野市で連続講座を再開

・七月 漢字探検隊「夏の漢字大冒険」と題した漢字探検隊が七月二六日東京キャンパスで開催され、午前中は、「貝から生まれた漢字」午後「田の字のある漢字」をテーマに後藤が講座を担当しました。

・十二月～一月 コロナで通常開催ができていなかった河内長野市の「くろまる塾」が、三年ぶりに全三回で開催されました。今年度は、「國の大事は祀と戎」をテーマに、①國とは何か ②祀とは何か ③戎とは何かの演題で後藤が講座を担当しました。

以上、今年度の主な活動です。



写真4
日本ラチーノ学院（滋賀）の授業風景

文化事業活動報告（二〇二二年度）

文化事業担当職員 久保 裕之

体験型漢字講座「漢字探検隊」

二〇〇七年度より始まった「漢字探検隊」は、人体や動物、植物、道具などをテーマに、座学だけではなく、見学やワークショップを通して漢字の成り立ちとものになった自然や文化を学習する体験型の講座である。これまでに全国で二百三十八回開催した。

過去二年間の経験を踏まえ、今年度は感染症対策を講じた上で、コロナ前に定例開催していた講座の復活（滋賀県草津市、兵庫県姫路市）や、ハイブリッド（対面＋オンライン）による開催など、その方式を模索してきた。また香川県高松市での八年ぶりの講座開催や、実質初めてとなる大阪府茨木市での開催など新たな展開も進めてきた。

地域	回	実施年月	テーマ	講座名	参加者数	場所
京都	65	2022・7	形音義	漢字なぞなどを作るう	78	立命館大学衣笠キャンパス
京都	66	2022・11	篆刻	はんこを作るう	64	立命館大学衣笠キャンパス
東京	1	2022・7	総合	漢字探検隊 in 東京&オンライン	90	立命館東京キャンパス&オンライン
東京	2	2022・8	総合	漢字探検隊 in 東京&オンライン	66	立命館東京キャンパス&オンライン
東京	3	2022・8	総合	漢字探検隊 in 東京&オンライン	81	立命館東京キャンパス&オンライン
滋賀	16	2022・9	文物	草津の街で漢字探検	85	草津市野路町新宮会館
香川	5	2022・10	建物	高松城で漢字と出会う	62	玉藻公園（高松城）
兵庫	9	2022・10	科学	科学と漢字クイズラリー	86	姫路科学館
宮城	4	2022・11	動物	動物と漢字クイズラリー	56	仙台市八木山動物公園
福島	16	2022・11	総合	漢字クイズラリー	150	福島市こむこむ
大阪	1	2023・2	人体	漢字ジェスチャー大会	37	立命館大学大阪いばらきキャンパス

学内他組織との連携事業

文化事業事務局は立命館大学の衣笠キャンパス地域連携課に所属し、漢字をツールとした地域連携事業を展開しているが、立命館大学の他キャンパス（びわこ・くさつキャンパス、大阪いばらきキャンパス）の地域連携課と共同で草津市および茨木市での「漢字探検隊」を開催した。また社会連携課はオンライン大学講座「JMOC」へのコンテンツ提供を行っているが、その中の「知っているようで知らない 漢字のなりたち」講座の制作に協力した。同講座の項目としては珍しい親子を対象とした講座で、好評を博している。

立命館附属校教員との白川文字学に基づく漢字教材制作ワーキンググループ（詳細は別稿に）も九年目を迎え、現在もハイブリッドでの会合を通して附属校間の漢字教育の連携と漢字文化の涵養を図っている。また提携校である初芝立命館中学校（大阪府堺市）への出張授業を行った。学外機関との連携

公益財団法人日本漢字能力検定協会（京都市）とは「漢字教育士」養成講座事業の受託を契機に、同検定受検者への当研究所の広報活動や情報交換等が活発に行われ、同協会との「漢検漢字教育サポーター育成講座」制度を通して育成した「漢字教育士」は、同資格保有者の約八割を占める。

産経新聞社（東京都千代田区）との共催事業「創作漢字コンテスト」は第十三回を数える。（詳細は別稿に）今回もアンバサダーに名誉漢字教育士の武田鉄矢氏を迎え、応募者数は前回より約一万通増加の約二万四千通となった。本コンテストは、文化庁、福井県ほかの後援を受け、富国生命保険株式会社の特別協賛、株式会社Z会、株式会社平凡社、株式会社モリサワからの協力を得ている。

立命館グローバル・イノベーション研究機構（R-GIRO）客員研究員の増田晶子氏（校友）や一般社団法人司延子モダンバレエとは、

二〇二〇年度に「古代文字ダンス（古代文字之舞）」の制作を委嘱したことが契機となり、その後も同法人主催の発表会のプログラムでの「古代文字ダンス」の披露、公演会場での漢字講義や白川静ミニ展の開催が実現した。

放送大学大阪学習センター（大阪市）では同校の面接授業に「漢字学」を開講、八科目を修了すると「漢字教育士」資格が取得できる。また大阪YMC A 日本語教育センター（大阪市）の日本語教師向けオンライン講座を担当した。出張講座では、今年度も京都高齢者大学校（京都市）、京都社会人大学校北近畿校（京都府福知山市）での連続講座のほか、摩気高山こども未来塾（京都府南丹市）から招きを受けた。

自治体との関わり

白川静先生の出身地である福井県では、学校教育や生涯学習に「白川文字学」に基づく漢字教育を取り入れる政策を実施しており、研修や学習会が開催されている。二〇二二年七月には、「白川文字学こども漢字教室『福井漢字探検隊 in 大野』」の講師として福井県大野市の南部酒造場に招かれ、他にも例年「福井県白川静漢字教育賞」への協力や主催講座への講師派遣など、緊密な関係が続いている。

兵庫県の姫路市立生涯学習大学校で開講中の「漢字学」は第七期生が入学、二年間の講義を受講する。二〇二三年度には第八期生の開講も確定している。また八月には同県多可町、十一月には西宮市、そして一月には大阪府河内長野市の生涯学習組織主催の講座に招かれた。

東日本大震災復興支援活動「漢字で元気に」

「漢字で元気に」は、二〇一一年三月に発生した東日本大震災の復興支援活動の一つとして、年齢・性別に関わらず共通の話題にできる漢字・日本語を、家族をはじめとするコミュニティの交流ツールとなるように、そしてそこから生まれてくる絆の力を震災復興に向けられるように、さまざまな話題や知識を提供する活動を行おうとする試みである。

二〇一一年に福島市と宮城県角田市とで活動を開始、岩手県を含めた三県で活動を行ってきた。二〇二二年度では十一月に仙台市立八木山動物公園と福島市こむこむ館で「漢字クイズラリー」を開催した。福島県での活動では福島大学・澁澤尚研究室の協力を仰いでいる。



2022年11月
第16回漢字探検隊 in 福島「漢字クイズラリー」



2022年12月
第66回京都漢字探検隊「はんこを作ろう」



2022年7月
福井漢字探検隊 in 大野（南部酒造場）

第十三回創作漢字コンテスト

研究顧問 加地 伸行

本研究所周知に産経新聞社共催の「第十三回創作漢字コンテスト」の結果発表を、産経新聞令和四年十二月二日付において行なった。

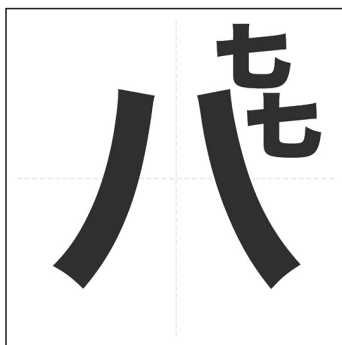
今回は二万三七四九点の応募があり、コロナ禍という悪条件の中であったが盛況であった。その原因の最大なのは、中小学校において、どうやら夏休みの宿題の一つとして、このコンテストが選ばれているからようだ。事実、個人投稿は少なく、大半は各中・小学校名の集団的応募であった。もちろん、それを教員が管理し学校名のある封筒を使って送られてきている。

また、このコンテストの協賛者（スポンサー）の中心である富国生命は、同社特製の応募用紙を作り、その用紙を使って投稿するときは、記念品として同社特製のボールペンを応募者に贈呈している。

このように、創作漢字の知名度は相当に上ってきている。それに対抗？してか、前記の十二月二十日発表当日、朝日新聞に半ページ強の分量で「創作四字熟語」の記事があった。わざわざ「創作」としているのは、我々の「創作漢字」を意識してのことであろうが、我々の「創作漢字」の中にはちゃんと創作の「成語成句」の部があり、勝れた入選作が出ている。スペースの関係で、最優秀作二点を挙げておこう。今回の入選作はすべてで二十九点。そのすべては前記の産経新聞紙に収録している。

二年後は第十五回となるので、なんらかの形で、その記念行事の準備を行ないたい。

（大阪大学 名誉教授）



バナナ

大阪府和泉市 和泉市立芦部小2年
くろやなぎゆうのすけ 畔柳雄ノ介さん



はかまいり

三重県松阪市 松阪市立久保中3年
中野広太さん

十二年目を迎えた「漢字教育士」の活動

文化事業担当 久保 裕之

二〇二一年度に創設した「漢字教育士」資格認定制度もまる十一年が経過し、資格認定者数が一〇〇〇名の大台を超えました。

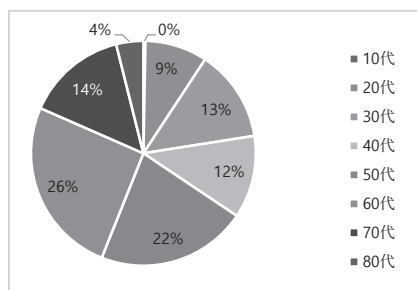
「漢字教育士」とは、漢字の成り立ちや文化的背景、現代の漢字・日本語の状況を理解し、幅広い知識を有するとともに、「教える力」を身につけた方です。漢字の楽しさを知った方が、それを伝えることにより、世の中に漢字文化の種をまき、花を咲かせようという思いから、この資格は生まれました。日本の社会においては、漢字・日本語は老若男女かわらず広く使われる媒体です。「漢字教育士」の活動が、人々の交流を広げ、絆を強めるものになることを期待しています。

漢字教育士資格認定講座の方式は、①指定機関での指定科目の修了、②漢字教育士資格認定ウェブ講座の修了の二つです。

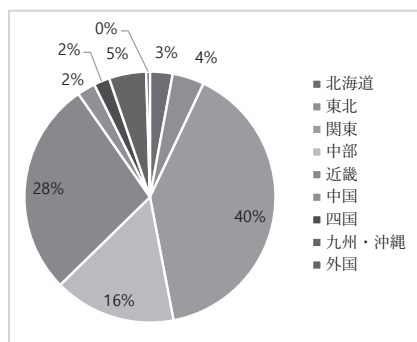
指定機関としては、放送大学大阪学習センターでの面接授業「漢字学」が毎学期開講されており、毎回関西地方をはじめとする全国からの聴講申込のある科目となっています。八単位取得が「漢字教育士」資格取得の条件となっており、その取得には最短四年かかりますが、地道に単位を取得して「漢字教育士」の取得をされた方も六名いらっしゃいます。また姫路市立生涯学習大学校では、二〇一六年度より二年コースの「漢字学」が開講しました。コロナ禍においても現在第六期生・第七期生併せて六六名の方が対面講座で学んでおり、これまでに二三名の方が試験に合格され、資格を得ています。

ウェブ講座は二〇一六年二月より立命館アカデミックセンターの直営講座の一つとして行われています。時間的・空間的制限がないのでな

年齢・性別統計〔履修プログラム修了者〕



登録住所地方別統計〔履修プログラム修了者〕



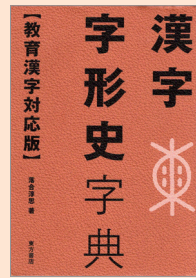
たでも受講でき、日本国内はもとより、国外在住の日本人や外国人の受講も増えています。また公益財団法人日本漢字能力検定協会（漢検協会）との提携も大きな効果を上げています。漢検協会は漢検受検で培った個人の漢字能力を社会に還元できる人材を育てようと「漢検漢字教育サポーター」制度を二〇一二年に創設、「漢検漢字教育ネットワーク」会員の中から毎年選抜されて毎年四月から翌年三月までの期間一年で本講座を受講しました。二〇二一年度をもって最終期・第十期の受講が修了しましたが、漢検協会とは以降も新制度を創設し、受講開始時期と期間を受講者の希望により選択できるようにし、引き続き学びの場を提供していきます。漢字教育士にはオンラインでの情報提供や交流会の開催、「漢字探検隊」での講師やスタッフ業務参加などの機会を設けて、フォローを行っています。

漢字教育士は二〇二二年二月末現在一〇五九名で、全国四十七都道府県そして海外六か国に在住しています。内訳は名誉漢字教育士二名（白川静先生と武田鉄矢氏）と特別認定者二名、課程修了による認定者一〇三六名です。そのうち、課程修了による認定者の内訳は次の通りです。

書籍紹介

落合淳思『漢字字形史字典【教育漢字対応版】』

(東方書店、二〇二二年三月一八日)

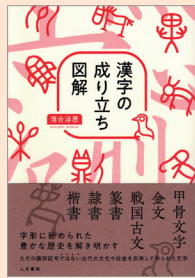


小学校一年生から六年生までに習う教育漢字とその同源字（合計一二七一字）について、殷代の甲骨文字や西周代の金文などから現在の楷書に至るまでの字形の変遷を図によって解説している。また、字形の起源（字源）や字音・字義・用法などについても取り上げている。

二〇一九年の出版である『漢字字形史小字典』に加筆したものであり、全二二六頁。巻末には音読み索引と画数索引を付している。

落合淳思『漢字の成り立ち図解』

(人文書院、二〇二二年九月二二日)



漢字の成り立ちを、部分ごとに色分けして分かりやすく図解した書籍である。象形文字の成り立ち、会意文字の構造、形声文字の意符と音符などについて解説している。また仮借文字・転注文字・旧字体などについても取り上げている。

序章・漢字の歴史／第一章・象形文字／第二章・指示文字／第三章・会意文字／第四章・形声文字／第五章・仮借文字・転注文字／第六章・複雑な変化をした文字／第七章・旧字体から成り立ちが分かる文字

出野正・張莉共著『魏志倭人伝を漢文から読み解く―倭人論行程論の真実』

(明石書店、二〇二二年一月一日)



魏志倭人伝は誤読されてきた。古代史学と漢字の融合により「倭」と「倭人」を同一視する従来の解釈、帯方郡から邪馬壹国に至る行程についての諸説を批判的に論証する。文献の漢文を状況語と捉えて、その著者が意図した統計的な漢字の意味を明らかにする。また、日本に残る金石文・風土記などを読み解き、九州王朝説について考察する。

高田宗平編『日本漢籍受容史―日本文化の基層―』

(八木書店出版部、二〇二二年一月二五日)



知識の根源となった漢籍は、どのように受容され、日本文化に根付いたのか。二八名の研究者が漢籍受容を学際的・通時代的に捉え、前近代の日本文化を立体的に解明したものである。口絵に唐鈔本、宋版、奈良・平安・鎌倉・室町各鈔本、五山版、古活字版、書籍目録、出土文字資料を掲載し、日本古代・近世初期の漢籍受容史を一望できる。

久保輝幸『与花方作譜―宋代植物譜録循環―』

(広西科学技术出版社、二〇二三年一月)



中国では南宋末までに植物に関する譜録（専門著作）が約百種編纂されたが、体系的な研究はJ. Meedham (1986)以降、行われていなかった。本書では各譜録の成立年や編者等の書誌を整理し、その思想や相互関係を明かにしようとして試みたものである。全九章からなり、竹桐の譜録、および牡丹・芍薬・菊・梅・蘭・海棠等の花卉植物の譜録と、茶書・酒書、食用植物の譜録について論じる。巻末に天理本『洛陽牡丹記』の彩色影印を附す。

山本堯『太古の奇想と超絶技巧―中国青銅器入門』

(新潮社、二〇二三年一月一三日)



太古の奇想と超絶技巧が凝縮された中国古青銅器の入門書。国内の博物館・美術館に所蔵される名品を中心に引き上げ、その魅力をさまざまな角度から紹介する。

(白川研事務局より)

白川研ウェブサイトを更新しました。



2022年8月5日より白川研ウェブサイトを更新しました。

今回、以前より課題となっていた新旧混合のフォーマットを解消し、皆様に必要な当研究所の情報にいち早く触れていただけるよう、全体の構成やデザインを刷新しました。また、スマートフォンやタブレット端末からご覧いただく場合にも見やすいように改善を図りました。

白川研ウェブサイトは、右上QRコードからご覧いただけます。


<https://www.ritsumeai.ac.jp/research/shirakawa/>

さらに利用しやすいウェブサイトを目指し、多くの皆様に情報提供を行ってまいりますので、何卒宜しくお願い申し上げます。